

Yì zhě sān yǒu, sǔn zhě sān yǒu

益者三友，損者三友

えき しゃ さん ゆう そん しゃ さん ゆう

益者三友、損者三友〈季氏第十六〉

桜美林大学名誉教授 植田 渥雄

この表題にあるのは孔子が自ら語った言葉で、次のような意味が込められています。友人選びには、得になる場合と損になる場合と、それぞれ三例ある。以下、さらに続きます。「友直，友諒，友多聞，益矣。友便辟，友善柔，友便佞，損矣（Yǒu zhí, yǒu liàng, yǒu duō wén, yì yǐ。Yǒu biàn pì, yǒu shàn róu, yǒu biàn níng, sǔn yǐ）」（直を友とし、諒を友とし、多聞を友とするは益なり。便辟を友とし、善柔を友とし、便佞を友とするは損なり）。つまり、真っ正直で、誠実で、博識、こういう人を友人に持てば得をする。逆に、うまく人に取り入り、物腰が柔らかく、口達者な人、そんな人を友人にすると損をする、ということです。

「直」は文字通り解釈すれば、真っ正直。しかし時には一本気で融通が利かないという意味にもなります。「諒」の基本義は「まこと」、日本ではたまに人名などに使われます。決して悪い意味ではありません。しかし悪くすると強情で、意固地、という意味にもなります。「多聞」も博識ということですが、意地悪くとれば、ただの物知りということにもなります。三者とも理想の人物像ではないが、友人に持つならこういう人物の方がプラスになるということです。

これに対して「便辟」とは人に諂うこと、「善柔」とはうわべはやさしいが誠意に欠けること、「便佞」とは口はうまいが心が歪んでいることです。こういう輩は麻薬のように人の心に入り込み、人を駄目にします。孔子が最も警戒したのはこの手の人物でした。頭ではわかっている、お世辞を言われるとついついその気になってしまうのが人間です。

一方で孔子は「人は過ちを犯すものだ」という考えを持っていました。次のようにも言っていま

す。「主忠信，无友不如己者。过则勿憚改（Zhǔ zhōng xìn, wú yǒu bù rú jǐ zhě。Guò zé wù dàn gǎi）」（忠信を主とし、己に如かざる者を友とする無かれ。過てば、則ち改むるに憚ること勿れ）〈学而第一〉。忠誠と信用を第一に考え、その点で自分より劣ると思ったら、そういう人を友人としてはいけない。もし自分が過ちを犯したときには、素直に改めることだ、と。つまり裏を返せば、自分の過ちを、誠意をもって本気で指摘してくれる人がいたら、そういう人を友人にすべきだということにもなります。「以友輔仁（Yǐ yǒu fǔ rén）」（友を以て仁を輔く）〈顔淵第十二〉。交友関係を通じて人間性を磨く。これは孔子最晩年の愛弟子の一人であった曾子の言葉ですが、孔子の真意を見事に体現しています。

では友人が過ちを犯した場合はどうすればいいのでしょうか。『論語』ではお馴染みの愛弟子、子貢の問いに答えて孔子は次のように言っています。

「忠告而善道之，不可则止。勿自辱焉（Zhōng gào ér shàn dǎo zhī, bù kě zé zhǐ。Wù zì rǔ yān）」（忠告して善く道き、不可なれば則ち止む。自ら辱しめらるること勿れ）〈顔淵第十二〉。まず忠告して、善い方向に導いてあげなさい。しかし、どうしても聞き入れてもらえないときには、あまりしつこくしない方がよしい。逆切れされて、かえってバカを見ることのないように、と。これは雄弁家で理論家肌の子貢に対して、その自信過剰に一本釘を刺した言葉とも受け取れます。過ちを改めるかどうかを最終的に決めるのは、忠告を受けた当人であって、忠告する側ではない。だから当人の自覚を気長に待つ。これも友情のうち、ということでしょうか。

（わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師）

五都市(上海・南通・揚州・鎮江・無錫)周遊 (5) 最終回

寺西 俊英

市の最後の訪問地の北固山から金山に戻る途中にある「西津渡街」から書いていきたい。この旅行記も年が改まり、今回のご紹介は、昨年 2018 年 5 月 22 日の続編である。「津度」とは、川の渡し場のことである。昔は西津度から対岸の揚州方面への渡し場が設けられていた。三国時代(220年～280年)には「蒜山渡」と呼ばれ、唐代(618年～907年)には「金陵渡」と名称が変わり、「西津度」と呼ばれるようになったのは宋代(960年～1279年)以降である。しかし、清代以降は長江の流れが北側にあたる揚州側に湾曲して流れたことにより、南側の鎮江市は土砂の堆積で浅瀬が拡がり西津度の港は内陸になってしまった。唐代には李白や白居易、そして宋代にはマルコポーロが訪れているが、宋の時代の街並みがそのまま残っているため別名「宋街」と呼ばれている。マルコポーロの見た西津度の風景が現代でも見られるということである。

バスから降りたところからガイドの案内で当時の街並みに入っていくと、平坦な石畳の道が続いている。そのうちに坂道となったがこの場所に道に沿って幅 1メートル程の大昔からの時代毎の西津度の港の高さが見られる遺跡があり、上部をガラスで覆っている。大昔はこの場所でも水深が随分あったことがこれから分かるが、数百年単位の階段状の遺跡は珍しいのではない。さらに進むと幅 3メートル位の石造りの階段の向こうに、この街の一つのシンボルであるチベット仏教の石塔と仏塔が見えてきた。両サイドは石垣やレンガ塀でレトロな感じの雰囲気である。石段の中央部分は幅 50センチくらいの一輪車が通れるように坂道が造ってあり、港で陸揚げした荷物の運搬に使った。石段を登りきるとまた平坦な道になった。すると急に場違いとも思えるモダンな 3 階建ての建物が見えてきた。旧イギリス領事館である。アヘン戦争終結時、1880 年に中英間で結ばれた南京条約により鎮江は開港させられ、イギリスはこの地に領事官を設けたのである。今は鎮江博物館になっている。イギリスの横暴ぶりが想起される。

さて鎮江の最後に「鎮江香酢」を紹介したい。揚州の名物と言えば、「揚州チャーハン」と「揚州獅子頭」という肉団子を紹介したが、鎮江の名物は「香酢」で、中国人ならみなこのお酢を思い浮かべるといふ。香酢



鎮江の旧英国領事館

は、長期間(5～8年)熟成させることによりアミノ酸含有量が多くなり、日本の黒酢の 10 倍以上、米酢の約 20 倍もあると言われている。免疫力の向上、成人病の予防、美肌、若返り、ダイエットの効果があるとの説明があり、ツアーの何人かは鎮江香酢をお土産に買いこんでいる人もいた。

午後 4 時前に全員バスに乗って無錫に向かって出発した。150 キロ弱の行程で午後 5 時半過ぎに無錫市内の「無錫恒通花園酒店」に到着した。6 時半から 3 階の半島の間で豪華な夕食を摂った後、わりりの友人 4 人で夜風に吹かれようと外に出た。少し歩くと大きなスーパーの前に出た。看板には大きな文字で METRO とある。この名はどこぞで見たような気がしたが思い出せない。そこに入ることにして、食後のデザートとお土産を物色した。紹興酒などを求めレジで代金を払うとレシートにこの店は中国語で「麦得龍」と書かれていた。



5 月 23 日(水)の夜が明けた。この旅も終わりに近づいている。時間過得真快だ。

無錫はご存知のように、無錫旅情の歌詞にあるように太湖の北の端に位置している。3 千年の歴史を持つ古い町で、中国では「江南之名城」と言われ、またその豊かさから「魚米之郷」とも呼ばれる。昔は大量の錫が採れたが漢代に掘り尽くされ、「無錫」という名が付いたと言われる。

ところで「太湖」は太古の昔、東シナ海の一部であった。しかし長江と銭塘江が運ぶ土砂で沖合に平野が形成されたことにより、内陸部に位置するようにな

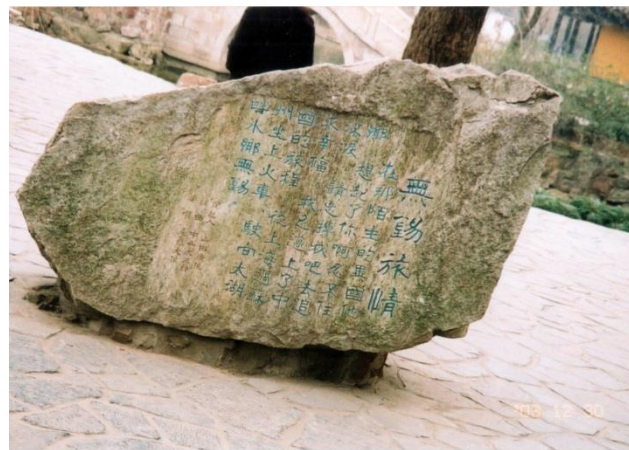


太湖仙島にある老子像

った。その後流入する河川により淡水湖となった。中国五大湖の一つで、三番目に大きい淡水湖である。面積は 2250 平方キロで東京都よりやや大きい。これまで見てきたように中国の大河の運ぶ土砂の量は半端なものではない。遠い将来、渤海湾は黄河により埋め尽くされ平野となり、また九州との距離は長江により指呼の距離になるかも知れない。

ホテルを 8 時半に出発し、「太湖鼈頭渚」に向かう。無錫の名勝の一番の人気スポットである。ここは無錫市街から西側の太湖に突き出た小さな半島にある公園で、巨大な岩が頭をあげたスッポンに似ていることから付けられた名前である。亀 (guī) の字に似ているが鼈 (yuán) は、大型のスッポンのことだ。この半島によって区切られたような細長い湖を「蠡湖」と呼ぶが、その一角にある「蠡園」は風光明媚なことで知られる。名前の由来は、春秋時代越王・勾踐の家来で呉王・夫差を倒すのに功績のあった功臣の范蠡(はんれい)が、官を辞したあと天下の美女・西施とこの地で過ごしたという逸話からという。

我々が訪れた日は快晴で公園を海沿いに歩いて行った。湖面は太陽の光で輝きまるで一枚の巨大な鏡のようである。太湖と言えば「太湖石」である。太湖に臨む大きな太湖石の石碑のそばに来た。石碑には中山大三郎氏が作詞・作曲し、尾形大作が歌った「無錫旅情」の歌詞が刻まれていて旅情を誘う。この歌がヒットしたのは今から 30 数年前の 1986 年のことである。この場所からまもなく遊覧船乗り場に到着した。我々は遊覧船に乗り込み遙か沖合に小さく見える「太湖仙島」に向かった。太湖仙島は別名を「三山」という。歌にある、〈♪はるか小島は三山か〉の三山で仙島は三つの小さな島から成っている。10 分くらい乗ったであろうか。波止場に着き、そこからしばらく歩くと島の中央に道教寺院が現れた。入り口の壁に「至虚無上」とい



太湖石に刻まれた「無錫旅情」歌碑

う道教の言葉が書かれている。中には大きなものは何でも好きな中国らしい見上げるような仏像がありとても見ごたえがある。そこから沿岸に出ると、これまた巨大な釈迦像、老子像、孔子像と中国における 3 大宗教の人物像が並んで置かれている。ありがたみはあまり感じないが、一見の価値はあった。島で 1 時間半くらいあちこち見学した後、11 時半頃また船に乗り戻った。皆バスに乗り「紫雲鮮館」というホテルで食事をとった。無錫について最後に一つ書き加えたい。町田市のお隣の相模原市は、無錫市と 1985 年に友好都市締結を行った。それから 30 数年経過しているが、毎年のように相互訪問を重ねている。しかし友好都市というものは一朝一夕に締結できるものではない。中華人民共和国が成立し、8 年後の 1957 年に当時の中国政府の王震農墾部長（後の国家副主席）が農業視察で相模原市を訪問し、これがきっかけとなり交流が始まったのだ。実に 60 数年の交流である。政府間ではいろいろあるが、やはり民間交流はとても大切である。

食後、午後 1 時に出発。一路上海に向かった。途中、陽澄湖サービスエリアでトイレ休憩。このサービスエリアは何度も利用したので懐かしい。上海は過去何度も書いたので、以下簡単に触れたい。15 時半に豫園に到着。入場料は 40 元であったが、60 歳以上は半額なのでパスポートを見せて 20 元で入場した。夜は黄浦江遊覧。翌 24 日は、午前中は、上海博物館に行き 2 時間ゆったりと鑑賞した。昼食は博物館から歩いてすぐのレストランに行く。食後 12 時 45 分出発、途中お土産を見たいという要望に応じてスーパーに立ち寄りし、午後 2 時に上海浦東飛行場に着いた。飛行機は 18 時 30 分の MU575 便である。16 時半頃 17 番搭乗口に集合。羽田には 20 時 50 分過ぎに無事着陸した。2 時間 10 分のフライトであった。思い出多き旅であった。

(おわり)

✪長安を「範」とした 仏教都市＝平城京

平城京は、710年にできました。しかし、794年わずか70余年を経て、その寿命を終えました。その後、長岡京を経て、平安京に遷都されました。捨てるにはいささか惜しかったような気がします。

当時の平城京は、「仏教都市」と称するのにふさわしい大寺が立ち並んでいました。ざっと並べると、薬師寺・大安寺・興福寺・元興寺・葛城寺・紀寺・東大寺・法華寺・唐招提寺・西大寺・西隆寺などが、

並立されていました。狭い首都の内外には僧侶が満ちあふれていたことでしょう。奈良朝時代の日本の人口は5～600万人と推定されますが、それを管理する(国勢事務)役人は1万人といわれます。その家族と使用人がざっと20万人程度、これらが平城京の人口だったといわれます。

私の日本史は、この奈良時代の名刹「唐招提寺と鑑真和上」に尽きます。

「南大門をくぐって、屋根の両端に鷗尾しびをあげた金堂を仰ぐと、心が天平の世にかえるような気がする」とは、司馬遼太郎氏の「この国のかたち(三)」の一節ですが、唐招提寺に関する著書の巻頭には皆さん同様の感動が記されているようです。それだけ、えもいわれぬ魅力を持つ寺ではないかと思っています。

✪唐風の「律」「令」のはじまり

「律」とは刑法、「令」とは行政法のことです。前世紀までの日本は、統一国家とはかけ離れて、津々浦々の諸豪族の郡立状態でした。唐より持ち

込まれた「律・令」という投網を打ち、農地という農地、人間という人間を、律令国家がまとめて所有し、統一国家を築いたのです。

不思議と思われませんが、この間、軍事力は用いられる事は無く、それぞれはその権利を放棄しています。はるか千数百年の後、1871年(明治4年)の廃藩置県にも同様なことが起きています。それぞれの大名は「新政府」誕生を前に、各の土地・住民を国家に差し出したのです。「世界の普遍的文明」の前に、国民は従うと言う気質は不変のようです。

ついでながら・・・

この「律令国家」は、奈良時代が最盛期でした。続く平安時代になって崩れはじめ、やがて東国を中心に「武士」という反律令的農場主が勃興し、ついには12世紀末、鎌倉幕府という極めて日本的な政権が誕生し、これによって「律令」制度は事実上無くなりました。日本史が、中国や朝鮮と制度を異にし始めたのは、この時代からといえるでしょう。

✪長安をなぜ、平安京に遷都されたのか

わずか70余年で都が京都に移りました。そのわけは？

最大の原因は仏教だと思います。平城京に建立された大寺は、みな国立(官寺)です。当然そこに所属する僧はみな「官僧」です。いわゆる国家公務員ですから官吏と同じです。というより、官吏以上に国家と人心を支配していたのでしょう。

もともと、奈良仏教は隋唐仏教を本家として展開していました。隋唐仏教は、「鎮護国家」が大原理でしたから、奈良の大寺の僧としては、僧が国家を守護するのは当然であり、また権利であり、国家そのものと考えたのは当然といえるでしょう。先に挙げた大寺の多くは、堂々たる大陸風の建造物です。柱も桁げたもふとく、ずっしりと安定し、伽藍配置もで

きるだけ隋唐の範に従っていました。もちろんこれらの大寺を造営するのは国家です。それらを修理するのも国家です。国家は官僧に俸禄を与え、法要も国費です。経巻も国家が買います。

一方では、彼ら（奈良の僧侶）は、民の救済などは考えていませんでした。官僧同士でもみ合い、派閥抗争をしていました。当然、宮中も政府も落ち着くいとまありませんでした。そんなわけで、宮中も政府も、首都そのものが大寺を置き捨てて、奈良を脱出したのでしょう。その証拠として、平安京遷都に際して、「新首都では大寺の造営が禁止された」という事実があります。

✪長安を新首都で興った平安仏教

平安仏教は、「貴族のために加持祈祷はするが、俗権に入り込むことはしなかった」、いわば、政治には関わらなかったということです。

今日の京都には、いわゆる「古刹」といわれる寺が多くありますが、それらの多くは、遥かに下って豊臣期や江戸期に興されたものが多いのです。たとえば、浄土真宗総本山の西本願寺・東本願寺は豊臣期から江戸初期にかけて京に移されたもの。浄土宗総本山の知恩院は、徳川家の宗旨寺として江戸初期に東山に興されました。それらのほとんどは「個人の安心立命」が中心で、信仰中心の鎌倉仏教です。

一方、平安末期には多くの「門跡寺院」がつけられました。寺というより、その本質は僧の住居です。東山山麓の妙法院（天台宗）、粟田口の青蓮院（天台宗）、左京区の聖護院（修験宗）、御室の仁和寺（真言宗）、嵯峨の大覚寺（真言宗）などがそれで、奈良の大寺のようなものではありません。

✪長安を平城仏教と平安・鎌倉仏教(参考:Wikipedia)

紀元前5世紀にインドで生まれた仏教が中国を経て日本に移って、その面影は全く異なるものになりました。以下は仏教を「文化」という視点で

ざ〜とまとめてみました。

平城仏教は、「鎮護国家」という思想のもと、律令国家によって保護された奈良時代の南都六宗、いわゆる奈良仏教で三論宗、成実宗、俱舍宗、法相宗、華嚴宗、律宗で、現在は後者3宗が現存しています。これらの六宗は学派的要素が強く、仏教の教理の研究を中心に行っていた学僧衆の集まりであったといわれています。

一方、平安仏教は、学問的能力を重視した顕教（秘密にせず、明らかに説かれた教え）にしても、厳しい修行と超人的能力を前提とする密教にしても、貴族仏教としての性格が強い。そうしたなかで、時代の変化、すなわち武士階級の台頭があります。一般庶民は、相次ぐ戦乱と飢饉に末法の世の到来を実感し、あたらしい救いを仏教に求めました。こうした要望にこたえたのが、信心や修行のあり方に着目した念仏と題目、そして「禅」の教えでした。これらは、庶民や新興武士階級にも受容できる仏教のあり方でした。そして、民衆の生活に奥深く浸透して、鎌倉仏教となりました。大陸から伝わった仏教の「日本化」を示す現象でしょう。

鎌倉仏教は、

- ・易行…厳しい修行ではない
- ・選択…救済方法を一つ選ぶ
- ・専修…ひたすらに打ち込む

などの特徴を有するといわれ、特に念仏を重んじる浄土系の浄土宗・浄土真宗・時宗に顕著にみられます。浄土系諸門はみずからを「他力易行門」と称し、禅宗（臨済宗、曹洞宗）の実践する座禅を「自力」のわざであり、「難行」であると批判されましたが、悟りに到達する方法として一つを選び、それに打ち込むあり方においては、禅宗もまた鎌倉時代に成立した他の「新仏教」諸派に共通する要素をもっています。

四川省北西部に在る丹巴などの女王谷(ギャロン)と周辺、それにチベット東部に多く残っている高い石の塔は、形(四角や八角や13角)や高さや建てられた時代や用途が様々です。詳細な説明は幾つもの分厚い本や論文等(注¹)に譲って、ここでは(個人的偏見が混じった)概要とトピックスだけをご紹介します。

1. 神殿

領主の館に有った高い石の塔は古代ボン教の世界構造だった9層で、最上部が神意を聞く神殿、その下が宝物蔵、その下が領主の居住区だったと考えられます。

隋書の女国や唐書の東女国に記された「女王が住む9層の塔を持つ館」を彷彿とさせる領主の館の一つは、250年位前まで丹巴の北隣の金川県に在った大領主の館です。清朝乾隆帝が女王谷へ進出した時に完全に破壊されましたが、乾隆帝が領主の館の全景を記録させています(写真1)。



写真 1



写真 2

二つ目が、70年位前まで丹巴の北部に在った小領主の館です。革命の時に破壊されましたが、約100年前に描かれた絵画を撮影したフィルムが残っています(写真2一部復元)。なおこの絵画の右側に描かれている雉は今も周辺の山中で見掛けます。

集落の高い場所に建てられた塔も昔は神意を聞く神殿だったようで、今でも近くに香木を焚き神へ奉納するための石の台が残っている場所があります(写真3)。

2. 見張り狼煙台

250年前前後の金川戦役の時代に数多くの見張り狼煙台が建てられました。女王谷で最も高い50m以上も有る塔もこの時代の物です。領地の境界に建てられた塔も見張り狼煙台です(写真4)。金川戦役の時、多く建てられたと同時に多くが破壊されましたが、生き残ったこの種の塔はその後倉庫に使われたり、取り壊して石材を新しく建てる民家に流用した



写真 3



写真 4

りされています。

3. 倉庫避難住居

子沢山の家や富豪な家が繁栄を祈って神への捧げものとして建て、倉庫や避難住居に使っている塔です(写真5)。2017年2月に「わんりい」の方々が丹巴の春節を参観された時に登った塔も、この一つです。

高い石の塔は、近年セメントを使って20m位までの物が博物館や観光用に建てられていますが、もっと高い泥で固めながら石を積む塔は数100年以上の間建てられておらず技術の伝承が途絶えたと言われています。

注1) 「Secret Towers of the Himalayas」 Frederique Darragon, Shenzhen Media Group Publishing House, September 2005, ISBN7-80709-043-X

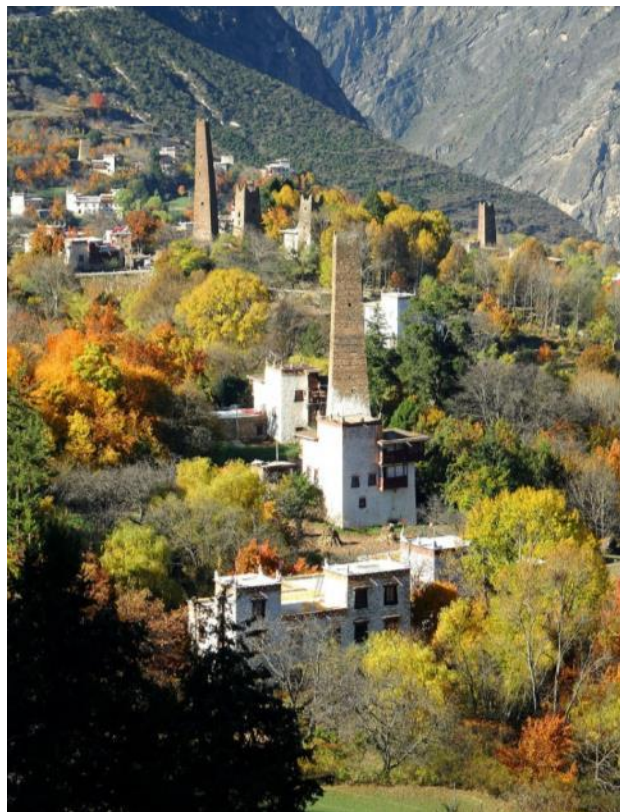


写真 5

●大川さんのホームページはこちら <http://rgyalmorong.info/index.htm>

<http://rgyalmorong.info/scholaweb/conts.htm>

▲お知らせ：女王谷のHP (<http://rgyalmorong.info/>) に、当地の風情を紹介するサンプルビデオ (MP4形式 8MB前後) 1分余り×15本を追加しました。日本語HPに入って頂いて、先頭頁の左下に有る、「風情のあるビデオ」でご覧になれます。(<http://rgyalmorong.info/scholaweb/queenvideo-j.htm>)

「漢詩の会」たより 26

(2018年11月25日)

李白と常建の「春夜洛城に笛を聞く」

報告:花岡風子

本日第一首目のお題は、李白の名作中の一つ『春夜洛城に笛を聞く』でした。李白の詩はこれまでも幾度となく取り上げられ、その人生もご紹介して来ましたが、この詩は彼が故郷を後にして放浪の旅を続け、長安の都にたどり着く数年前、洛陽に立ち寄った時のものとされています。当時洛陽は長安に次ぐ大都市でした。

chūn yè luò chéng wén dí lǐ bái
春 夜 洛 城 闻 笛 李 白

shuí jiā yù dí àn fēi shēng
谁 家 玉 笛 暗 飞 声
sàn rù chūn fēng mǎn luò chéng
散 入 春 风 满 洛 城

cǐ yè qū zhōng wén zhé liǔ
此 夜 曲 中 闻 折 柳
hé rén bù qǐ gù yuán qíng
何 人 不 起 故 园 情

春夜洛城に笛を聞く

誰が家の玉笛か暗に声を飛ばす
散じて春風に入りて洛城に満つ
此の夜曲中折柳を聞く
何人か故園の情を起さざらん

いつになく寝つかれない宿の寝床の中で、何度も寝返りを打つうち、何処からともなく漏れ聞こえる笛の音にハツとする、そんな作者の姿が浮かびます。聞き入っているうちに、調べは別れの曲を奏で始め、別れた家族や友人の顔が次々と思い

浮かぶ。やがて枕に顔を埋めるようなしぐさが連想され、もの悲しげな笛の音と春風の音に入り混じり、作者の深い吐息までもが聴こえてくるような詩です。「李絶杜律」と言われるように、杜甫が律詩を得意としたのに対し、李白は絶句を得意としていました。この詩も李白得意の見事な絶句と言わざるを得ません。

「折柳」または「折楊柳」という言葉は漢詩の常套句の一つで、「別れ」を意味します。柳の枝を折って旅立つ相手への餞はなむけにするという風習からきたものとされています。また「故園の情」と言うのは「望郷の念」のことで、漢詩ではよく使われるそうです。

思い起こせば、中国語を習い始めた頃「花落有意，流水无情」という言葉が、片想いを表すと知って、中国語にとってもロマンを感じたことがありました。中国人は現実を重んじる民族であるとよく言われますが、その歴史はロマンに満ちていて、そのロマンを紡ぐ言葉にも魅力を感じます。

植田先生が「この折柳からどうしても連想せざるを得ない」と、かつて取り上げた、王之渙おうしかんの『涼州詞りょうしゅうし』と題する辺塞詩をホワイトボードに板書されたのを皆で音読しました。

huáng hé yuǎn shàng bái yún jiān

黄河远上白云间

yī piàn gū chéng wàn rèn shān

一片孤城万仞山

qiāng dí hé xū yuàn yáng liǔ

羌笛何须怨杨柳

chūn fēng bú dù yù mén guān

春风不度玉门关

声に出して読んでみると、黙読とは違う世界が広がります。音の世界は心を揺さぶるものがありますね。この詩の三句目の「怨楊柳」は別れを恨む、という意味で使われています。

「王之渙は実際に辺境の地に行った形跡はないんですよ。当時、辺境に近い涼州で流行っていた歌をモチーフにして、絶句体で書かれたものですが、同じ題名でこの類のものはたくさんあります。さてこの詩は、文法的に考えれば考えるほど意味がよく分からないけれど、荒涼とした大地と、春

風も吹かないような寂しいところに行く友を送る、という心情だけはヒシヒシと伝わりますね。「」はるばる来たぜ函館」などと、函館に行ったことがない人が歌うカラオケと同じだね。」の一言には、この歌、アラフォー世代の女子にはなじみの薄い歌かなと思いつつ、周りで笑っていらっしゃる先輩方の面々をチラ見しておりました。(笑)

二首目はその辺塞詩とのつながりから、常建という詩人の『塞下曲さいかのきょく』其二が取り上げられました。この詩はどういうわけか、中国より日本で有名で、詩吟では定番になっているそうです。というのも、昔から日本人に親しまれてきた『唐詩選』に載っているからでしょうか。しかし中国人の好んで読む『唐詩三百首』には載っていないせいか、中国ではさほど有名ではないのだそうです。中国では同時期に作られた『塞下曲』其一の方がよく知られています。

作者の常建は生卒年不詳です。若い頃、科挙に合格したものの、役人生活が性に合わず、隠遁生活を送った人らしいです。李白のような超天才詩人はともかく、一般にお役人として出世しなかった人は記録が残らず、詳しいことは伝わりにくいようです。いずれにせよ、盛唐の詩人であることだけははっきりしています。年齢は李白より年下、杜甫より年上であったであろう、とのことですね。

sāi xià qū qí èr cháng jiàn

塞下曲其二 常建

běi hǎi yīn fēng dòng dì lái

北海阴风动地来

míng jūn cí shàng wàng lóng duī

明君祠上望龙堆

dú lóu jiē shì cháng chéng zú

髑髅皆是长城卒，

rì mù shā chǎng fēi zuò huī

日暮沙场飞作灰。

一句目は「北海の陰風地を動かして来たる」という何となく不気味な始まりです。北海というのは海ではなく、北の方にあると思われていた湖のことで、実際には北方の砂漠地帯を連想させます。そこから立ち上る風が大地を這うように、砂嵐を

起こしつつ迫ってきます。「中国語では風が吹くことを『刮風』と言いますが、髭を剃るのも『刮臉』と言いますね。『吹風』という言い方もありますけど、これは春風という感じですね。」と植田先生。なるほど北方の風の吹き方は南方の春風のような穏やかなものではなく、大地の砂を吹き上げるような、つまり大地ごと動くような吹き方なのだ、改めて思わされました。

二句目は「明君祠上龍堆を望む」とあります。これは、漢代の悲劇のヒロイン王昭君の墓から、龍堆（龍のようにうねる砂丘）を見渡すこと。そして三句目は一転して「髑髏は 尽く是れ長城の卒」と続きます。そこには長城に駆り出された兵卒たちの髑髏があちこちに転がっている。そして最後はその髑髏が「日暮砂場に飛んで灰と作る」。つまり、その髑髏が夕闇迫る戦場に砕け散って灰となっている、というのです。荒涼とした凄まじい光景ですね。なお「沙場」には戦場という意味もあります。

これも七言絶句で、まるで絵に描いたような「起承転結」で構成されています。最後の句で骨が灰となって砂に混じり、それがまた一句目の「北海の陰風」へと返ってきます。「戦争の悲惨さを強調した詩ともいえますね」と、植田先生。常建も辺境の地に実際赴いた経歴はなく、悲惨な砂漠の光景を頭の中でイメージして作った詩のようです。

「でも、頭ん中で作った詩が悪いわけではないですよね。」「リズムがよく朗読しやすい詩でもあります。」と植田先生。『塞下曲』という題名の作品も『涼州詞』と同様、流行歌として多くの詩人達が手がけています。ちなみに同一作者の『塞下曲』其一は凱旋を讃え、平和の喜びを詠っています。

さて、今朝アラフォー女子は朝の散歩で久しぶりに、12月初旬の枯れ落ち葉を踏んで歩きました。足元で立てるパリパリと乾いた音を聞いていると、「失意は落ち葉に似ている」、ふと、そんな思いが込み上げてきました。落ちた時は色とりどりだった落ち葉もやがては色褪せ、乾き、砕けて土になる。人間も同じじゃないか、と思いました。大きいのも小さいのも、立派なものもそうでないのも、最後は土になる。それが自然の摂理なのだ、と。

人は心の中の風景と同じものを外に見、そして空想する。だとしたら、自身は都に居ながらも、

辺境のどこまでも続く荒涼とした砂漠と、人知れず朽ち果て、やがて砂になる人骨を空想している常建の心の内は、きっと失意に満ちていたに違いないと思うのです（このところは漢詩になりそう?）。

役人として、うまく立ち回ることが出来なかった不器用な人物と、その失意が、やはり世間で器用に立ち回れない不器用なアラフォー女子の自分と重なり、ことのほか、この詩人のやるせなさが胸に迫りくるのです。

最後にもう一首、すでにお馴染みの辺塞詩を、先生は復習の材料として板書されました。

liáng zhōu cí wáng hàn

涼州詞 王翰

pú táo měi jiǔ yè guāng bēi

葡萄美酒夜光杯

yù yǐn pí pá mǎ shàng cuī

欲饮琵琶马上催。

zuì wò shā chǎng jūn mò xiào

醉卧沙场君莫笑，

gǔ lái zhēng zhàn jǐ rén huí

古来征战几人回。

葡萄の美酒 夜光の杯

飲まんと欲して琵琶 馬上に催す

酔うて沙場に臥す 君笑う莫れ

古来征戦 幾人か回る

「これも辺境の地をイメージしながら、想像から生まれた詩でしょう。王翰は科挙に合格しながらも、終始飲んだくれの人生を送った人で、自ら辺境に赴いたという形跡は見当たりませんね。それに、辺境に駆り出された兵士たちが、実際、馬上で葡萄の美酒、つまり高級ワインを、これまた稀少で高価な夜光の杯で飲んだとは思えませんしね。」と、植田先生。

先生のお話しに頷きながらも、一方、死の世界へと赴く兵士の凄まじいまでの虚しさが、美しい短編フィルムのようなロマンにまで昇華されたこの詩は、やはり名作中の名作だなあ、とため息をつく私でした。

陝北の旅・報告そのⅢ 橋 詰 滋

★4日目（9月26日）の続き

（前回までのあらすじ）

この日は、乾坤湾→清水湾を経て、文安驛に行く予定でありましたが、時間的に少し余裕がありましたので、習近平国家主席が文化大革命の折に下放されていた梁家河村に立ち寄ることになりました。

我々は、遊園地の絶叫マシンよりも絶叫を体感できるバスに揺られ、5分程で梁家河村に到着しました。近くに商店がありましたので、そこで地元産のお酒などの商品を物色し、今晚のお酒は何にしようかなと呑気に考えていました。

★そのとき、思いがけないトラブル！！

1台のパトカーが商店の前に止まり、警察官がぞくぞくと降りてきて、我々の方に向かってきま



パトカーと榎野氏



習近平のヤオトンの内部

した。警察官の一人が黄氏と会話した後、我々に一緒に交番まで来るよう指示しました。

我々は、バスに乗せられ、パトカーの先導のもと、交番に連行(?)させられました。誰かが「今日の宿は留置所ではないのかな?」と言っていたのを覚えています。中国の留置所がどうなっているのか興味がありますが、やはり泊まりたくはありません。

交番に到着後、交番の奥にある警察官の仮眠所に押し込められ、しばし待たされました。

警察官と黄氏との交渉が続いた後、警察官からパスポートを提出させられ、梁家河村へ入場するための手続きをさせられた後、我々は解放されました。この間、時間では30分くらいだったと思いますが、2時間くらいに感じました。

結局、我々が何故交番に連れてこられたのかについて不明であります。ある人曰く「黄さんが専用バスの運転手に速すぎると注意したから、運転手が警察官に怪しい外国人がいると告げ口をしたからじゃないのか」。

最後に、警察官に記念撮影をお願いしましたが、もちろんNGだったため、我々を先導したパトカーの写真を掲載します。

我々は解放された後、習近平が下放時代に過ごしたヤオトンを見学しました。習近平のヤオトンは当時のまま残されていて、彼がこんなに粗末な暮らしをして、そこから立志出世したということが強調されているようでした。中国国内の共産党や政府関係機関、企業の社会科見学の場となっているようであり、見学者は非常に多かったが、やはり外国人は我々だけでありました。

見学後、専用バスに乗り、梁家河村の入口まで戻りました。帰りのバスは行きほど飛ばしていませんでしたが、バスの運転手は、同僚の女性と私



文安驛の門の前で記念撮影

語をしながら運転をし、安全運転とはほど遠いものでした。

再び、趙氏が運転する安全なバスに乗り換え、文安驛に5分くらいで到着し、この日の宿にチェックインしました。宿はヤオトンを利用したものでありますが、内装は非常にきれいであり、シャワー、水洗トイレ、テレビ、Wi-Fiなどの近代的な設備が完備され、快適に過ごすことが可能であります。ただ、この日の宿では、楨野氏・浪花氏の部屋で、部屋のドアが完全に閉まらないというトラブルに見舞われました。毎回、何らかのトラブルが発生することにも、だんだん慣れてきました。

宿に到着後、黄氏が忙しそうに、宿のスタッフと何らかのやり取りをしていたことが印象に残っています。この時は、黄氏の行動が次の日に起こるサプライズにつながることになるとは思いませんでした。

文安驛の町を散策した後、文安驛のヤオトンを改装したレストランにて夕食を取り、この日の行程は終了しました。

結局、この日も天気が悪く、名月を眺めることはできなかったことは残念であります。

★5日目（9月27日）

私は6時頃に起床し、宿の敷地を散策しました。宿は、3穴のヤオトンで1組の長屋を構成し、宿の敷地内に20組くらいの長屋があり、一つの集落みたいになっていました。宿内を30分くらい



樊さんの作品

かけて散策し、朝靄に包まれたヤオトンの集落はとても幻想的でありました。

7時に朝食を取りましたが、ここでも、飲み物がなく、申し訳ない程度にお粥があるのみでした。やはり、この地域の方は朝食のときには、飲み物を飲まないのだろうと、勝手に思い込むことにしました。

我々は8時半に宿をチェックアウトしました。この日の最初の目的地は高鳳蓮芸術館であります。ここは、この「わんりい」にも度々記載があります。高鳳蓮さんの剪紙を展示した美術館であります。高鳳蓮さんに関する説明については、「わんりい」に掲載された過去の有為楠さん等の記事にお譲りしたいと思います。（「黄土高原に咲く目にも彩なる花々・剪紙」で検索可）

高鳳蓮芸術館に行くときになって、前日に黄氏が、忙しそうに宿のスタッフの方とやりとりをしていた理由が判明しました。宿より地元の延川県の役場を通じて高鳳蓮さんの娘さんに連絡をとって、娘さんの劉潔琮氏とその旦那さんが10キロ先の延川県より早朝にも拘らず、宿まで御足労いただくことになっておりました。これには、皆さん驚くあまりで、何と云ってよいのか、ただ感謝をするのみでありました。

我々一行は劉夫妻ともに、高鳳蓮芸術館へ向かいました。道中、舗装されているが大変険しい山道を走り、15分くらいで到着しました。なんと、一昔前までは、舗装された道でなく、獣道みたいなところを徒歩のみで登っていたようであります。